

故はすの中に子をうみてかくしたるを、母鳥のうとふがまねをして、うとふくとよべば、やすかたと云てはい出るを取と也、其時母空にかなたこなたへつきありきて、鳴涙雨のごとくにちにてふる間、其涙かゝりて身のそんする故に、みのかさをきる也。

〔大和本草水鳥十五〕善知鳥 若水曰、奥州ノ津輕外ノ濱ノ邊ニ多シ、其形バンニ似テ、味脚モバンニ似タリ、頭ハ鳬ノ如シ、嘴ノ上ニ肉角アリ、赤色也、脚赤シ、背ノ毛淡黒、腹ノ毛白色、是バンノ類ナルベシ、漢名未詳、善知鳥ハ國俗ノ所稱ナリ、

〔和漢三才圖會四十〕善知鳥 正字未詳 俗云宇止布

按善知鳥鷗之屬、形色似鷗而觜黃末勾、脚淡赤色、奥州卒土濱有之、特津輕安湯浦邊多、信鳬 本綱、鷗之屬、隨潮而往來、謂之信鳬、

按隨潮來往形小於鷗、脚赤觜末亦微赤者、俗呼曰由利鷗、恐是信鳬矣、善知鳥亦近于此、

〔本草一家言四〕善知鳥 津輕青森村安方町有池、池中有鳥狀如鳥、而翅黑腹下白嘴赤色、且尖脚長四五寸、色黃、名之曰善知鳥、其聲如云鳥登宇、故得名、俗間謠曲有善知鳥謠、即指此物也、

〔烹雜の記 前集上〕多湊ぶり

佐渡國雜太郡相川の鎮守を善知鳥大明神ト號す、橋掘津神明春日の兩社同所に相並て立せ給ふ、これを相川の三社と稱せり、土俗の說に、善知鳥の神社は周景王のおん女を祭るといへり、中略祭る神こそ定かならぬ、善知鳥は出崎といふがごとし、陸奥の方言に、海濱の出崎をうとふといふ、外濱なる水鳥に、觜は大くて眼下肉づきの處、高く出たるあり、故にこれをもうとふといふ、彼鳥の觜に喻て出崎をうとふといふか、出崎に比て彼鳥をうとふといふ歟、何にまれさし出たる處をうとふといふは、東國の方言なり、美濃の御嶽驛の東にうとふ村あり、信濃にうとふ坂あり、いまは鳥頭と書、これらみなさし出たる處なれば、うとふといふなるべし、さてうとふを善知